



付箋の跡 | 触れ方

忘れたはずの出来事に、
まだ剥がれていない印。

それは記憶ではない。
意味でも、感情でもない。

過去に何かがあった場所に、
あとから貼られた印のようなものだ。

消えたはずの出来事的位置に、
なぜか印だけが残る。

これは後悔の話ではない。
過去を清算するためのものでもない。

傷を癒すための言葉でもなければ、
前向きになるための解釈でもない。

ただ、
そこに印がある。

それだけのことだ。

すべてが同じようには残らない。

何も起きなかった場所は、
そのまま通り過ぎていく。

けれど、何かが強く触れた場所にだけ、
あとから印がつく。

剥がされたはずの付箋の、
跡だけが残るように。

時間は進む。
同じ場所に立っても、何も起こらない。

それでも、
そこにだけ少しだけ慎重になる。

避けているわけではない。
ただ、触れ方が変わる。

かつて印が貼られていた場所を、
身体が覚えているように。

あの出来事を思い出しているのではなく、
そこに、粘着だけが残っている。

Edition — 存在の芯
別景：付箋の跡

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026